

# 本を読む速さ

——国語の基礎学力の一つとして——

栗林 三千雄

本をよむ速さには二種類ある。声をだして読むときと黙ってよむときである。どちらにしても、ふつうの人はそれを何分何秒まできちんと測るようなことをしようと思わない。「一分間に三百字よむのが標準速度だ。」<sup>(注)</sup>ということを知っているのは職業上の必要のある人だけである。たとえば、第一にテレビ、ラジオのような放送関係の仕事をしている人、これらの人たちは、刻まれた時間に追われて生活しているから、秒の単位まできちんと計算している。劇の中継なんかをテレビで見ている、三十秒を切れると、見ている方じゃ、もう時間がないように思えて、はらはらしているのに、わずか十秒という間をあけて終わって、あざやかに次の番組に切りかわってゆく。こういう時の一秒一秒は、その長さがしみじみと感じられる。

一時間単位で仕事をしているのに、学校の先生があるが、教室で教える仕事はベルが鳴り終ると同時に、いつもきちっと予定した所まで終らなければならないものでもない。だから秒単位まできちんと勘定する必要はないけれど、せめて分単位ぐらいの計算はできないと、はずかしい。われわれ国語の教師の場合だと、たとえば、あ

と十五分あるから、これぐらいの長さの教材なら終りまでよめるだろうと思つて、生徒に当てて本をよませる。だれでもそれぐらいの見当は大体つけられる。ところが、当てられた生徒がすらすらよんでくれず、時間が大幅に遅れてしまつて、もう授業の終りがくるのに、大分よみ残している。こんなとき、ベルが鳴ってもかまわずに休み時間にくいこんでよみ終らせるか、それとも切り上げて次の時間にもう一度よみ直しさせるか、迷うのである。大ざっぱにやっている、こんなめにあう。

生徒の音読の速度を標準の速度と比べると、うまくよむ生徒でも、三百字一分に比べて、ほんの少しなのだが、早い。職業的なよみ手が職業人である所以は、間のとり方にある。生徒はいくら上手でも、もう一呼吸間がもてない。その差が、ほんのわずかだが、時間として出るのである。けれども、下手なよみ手の長さにはきりがない。百字よむのに、二分、三分どころか、五分かかるのさえている。たとえ三分でも三倍である。三分でよんでもらうつもりを十分近くかかって読まれては、もうどうにもならない。だからそんなとき、はじめ少し聞いただけでこれは何分かかりそうだと思当がつくなら、それではどうしようかと聞きながら対応策が立てられる。時間内に予定通りよみ終えたかったら、下手な読み手は適当にうち切つて次

のよみ手をさがす。そうでなければ覚悟をきめて、ゆっくりつきあうことにする。はやくわかれば、それだけ対応もはやくなるのだ。国語の先生は数字によわいものだが、この頃はその弱点を補ってくれる便利なものがあった、ボタンさえ押せば計算してくれる。三百字の文をよむのに一分かかるなら、六十秒を三百で割って、一字当りに直すと、〇・二秒となる。これ自身は無意味な数字だけれど、教科書のように一教科書に限らないが、一頁の行数、一行の字数がまちまちで、一頁の総字数がつかみかねるときは、この方がずっと計算しやすい。例えば一頁五六六字（16行×41字）「光化門」筑摩書房版高三つまっているときは、一頁よむのに一三一・二秒、つまり二分十秒あまりかかるし、四七六字（14行×34字）「坊っちゃん」教育出版社版中一の頁なら、九五・二秒、つまり一分半あまりでよめることになる。

これはしかし、標準速度であって、さつきもいったように生徒によませると、「ほんの少し」だけ早くなる。

生徒に何か一頁をよませて、それをストップウオッチで測る。字数もきちんと勘定して、測った時間をその字数で割る。勿論つまらずにすらすら読めたときだけが対象となる。こうして何回か調べてみたのだが、〇・一九秒台か〇・一八秒台で、（生）もっと早く〇・一五秒という場合もあった）〇・二秒にはならない。〇・二秒との差が〇・〇一〜〇・二ある。これが「ほんの少し」なのだ。うまくよめるようになる、反ってすらすらよみすぎてしまつて、間を一息とることができないのである。

念のためにラジオの朗読をカセットにとって測ってみたが、この

方は一字当りに直すとやはり〇・二秒から〇・二三秒と、〇・二秒を切ることがない。ことがずつと続いているときは、割合に早いのだが、間をたっぷりとるので、全体として割ると一字当り〇・二秒になる。

このように、一字当り〇・二秒という数字を境に、アマとプロとの差があるとすれば、この数字そのものもつ意味は実際にはなくとも、つまり一字を〇・二秒でよむなんてことは無意味なのだ！音読の際の目標としては大切である。生徒だって先生だって、お父さんだつてお母さんだつて、練習してすらすら読め、間をしつかりとることができるようになれば、この標準速度でよむことができる。そこにこの速度の意味があると思う。

## 二

音読の際の速さに、このような標準があるとすれば、黙読の速さになつて、何か基準があつていいではないか。

現在の高等学校の国語の授業で、現代文の教材の長さが十頁をこすのは珍しくない。これを生徒に全文音読させると、標準の速さで一頁が二分あまり、十頁よませると二十数分。いろいろの生徒に当てているとまず倍以上かかつて、読むだけで五十分の授業全部をあてるつもりにならなければならない。

そのように長い文章を生徒に音読させることに、ではどんな意味があるのだろうか。

教室で生徒に音読させるのは、本をよむ御本人のためではない、残りのきいている生徒のためである。そうでなくて、本人のためで

あるというなら、声をだしてよむことにどんな意味があるのだろうか。

昔の前で立つて声を出して本をよむ、その行為そのものには意味があるかもしれない。しかし、本の内容を理解するためには、すわったまま黙ってよんだ方がいいと思う。現代の文章は音読される文章ではない。論説文は当然のこと、小説でも音読されることなくて予想して書かれてないだろう。だから、教室で声をだしてよむのは、もっぱらきいている生徒のためである。きいている生徒の方は、耳からと目―教科書を見ているから―からの理解だから、一方からの刺激よりもわかりやすかるう。けれど、下手なよみ手につきあうのは誰にとっても退屈である。下手なよみ手がつづくと、教室はすっきりだらけてしまう。そんな犠牲を払ってまで一人一人よませることにこだわることはないだろう。

といて、よくよめる生徒だけに当てることも問題がある。かれらはいわば教師がよむべきなのを代行しているようなものだ。それなのに、すらすらよみ終ったとたん、今よんだ所に何がかいてあったかとか、大意を言えとか、難問がふりかかってくる。答えられず黙っていると「よんでいてわからんのか」とか、「いいかげんによんでるからだ」とか怒られる。音読は読み手自身の理解のためではなく、みなを理解を助けるためのものだという認識のない教師にあうと、皆にサービスした上に怒られるという割の合わない仕事をさせられる。そして、そう言って怒ってきた自分だということに今こうして思い至ると、はずかしい限りである。教えることが情性となつてガタピシしだと、当たられるのはいつも生徒である。

さて、教材の文章が長くなったということは、全体を音読することを期待していないからであろう。とすると、授業も黙読が中心となってくる。では黙読では、たとえば十頁の教材を何分でよむことを予定すべきだろうか。私をはじめ黙読に要する時間を測つてみたのは、記録をしらべると一九六六年である。この年の夏の国語教育学会での「論説文教材の扱い方について」の研究発表の準備をしているときに「論説文はいいかげんによむかきり何遍よみ返してもわからない文章である」という定義を思いついた。この定義を定義らしくするために、この「いいかげんによむ」とはどういうよみ方かということを明らかにしないといけない。そこでこの「いいかげんによむ」よみ方を何冊か本をよみ比べながら試してみた。

その頃に子どもを相手によんでいた「とびらをあげるメアリー・ピンズ」、白井吉見著「安曇野」、高見順の「昭和文学盛衰史」、ややかた「日本社会の家族的構成」川島武宜著、ここらまではいいかげんによんでもなんとかわかるが、岩波新書「日本列島」(第二版)、メルロ・ポンティの「行動の構造」の二つになると、定義どおりで、いいかげんによむ限り何べんくり返しても歯がたない。いいかげんによんでわかる速度は、たとえば一万字(十頁ほど)よむのに、はじめの二冊が五分前後、「昭和文学盛衰史」が七分、「日本社会の家族的構成」が十分かかった。―十頁よむのに十分かかっている、あまりいいかげんによんだとも言いにくい気もする。「日本列島」と「行動の構造」は、一応わかるためにも構文をきちんとつかんでよまねばならず、それぞれ一万字よむのに二十分、四十分かかっている。

同じ人間がよんでさえ、本によってこれだけの差がでてくる。人が違えばその差はもっと大きくなるのではなからうか。いったい基準となるような黙読の速さがあるのだろうか。考えると心細くもなるが、音読に基準の速度があるのだから、黙読にもあつていいではないかとも考えられる。

### 三

とにかくまず自分を基準にして測るということから始める以外にあるまい。第一の目標としてできるだけ早くよんだときの速さ、つまり速さの限界ということからはじめることにした。自分を基準にする都合のいいことは、音読の場合は、そっちでよむのをこっちでよむか判ることである。音読の場合は、そっちでよむのをこっちでよむか判ることは、よんでいていま理解しているかいないかきいていて頭を働かせるのだから、よんでる方では、判るか判らないかに無関係でよむ。従つて、早すぎてもよんでる本人にはわからない。けれども、黙読はよむのも理解するのも同一人だから、自分が理解できないような速さでよむということはない。

先の調査では一万字をよむ速さを測つてみたが、黙読の場合には三百字をよむ速さを測るのはむりである。先の例では一番早くよむのに五分かかっている。一字当りに直すと〇・〇三秒となる。このばあい三百字よむ時間は九秒となり、測るにはあまりにも短かすぎる。せめて千字、一字当り〇・〇三秒なら、これで三十秒かかり、一応は測定可能で意味のある数字が、えられよう。がしかしやはり五千か一万字はほしい。というのは、次のような問題があるからである。適当な頁をひらいてゆくと、だれにでもわかることだが、会話の

多い頁は改行がしきりにあつて頁の白さがめだつ。いま手元にある文庫本で会話の多い頁をとつて、千二十二字分に当る二十五行の字数をかぞえてみると、句読点を入れても三百五十一字しかない。三分の一である。こんどは別のあまり改行のない頁でかぞえてみると、八百二字<sup>(注)</sup>ある。この二つをよむ速さを測つてみると、前者が二十一秒、後者が三十八秒だった。一字当りに直してみると、〇・〇五九秒と〇・〇四七秒である。これはできるだけいいにいによんでみたつもりである。

いまこれらとともに千二十二字で割ると、一字当りの秒が、〇・〇二〇と〇・〇三六となる。一字当りの速度なら、さきの実字数を数えて計算した数字が一番正確ではあるう。しかし、実は一字当り〇・〇何秒という数字はそれ自身全く無意味な数字である。私がしらべたいのは、一頁をよむ速さであつて一字をよむ速さではない。いや、一頁二頁をよむ速度でなくて、そのつみ重なつた十頁二十頁、百頁二百頁の一つの作品、一冊の本をよむ速度をしらべたいのである。一字当り何秒というのは全くかりの数字にすぎない。ある個所はいいにいによみ、ある個所は走りよみする。その度に一字当りの速度は変わるだろう。だからそれらを通しての速度をしりたいのである。

従つて一頁ごとに実字数がちがつている以上、各頁の字数としては、その頁に印刷されるべき字数をとりたい。そしてできるだけいろいろな誤差をへらすために、五頁、十頁、できればその作品、あるいは本全体をよみとおして、その時間を測り、それを「一頁詰めの字数×よんだ頁数」で割つて、一字当りの時間を出し、それを一

つの目安としたのである。

同じ作家の同一作品の文章なら、それでいいだろうが、作家がちがいで、作品がちがうときはどうするか。たとえば幸田文の「みそっかす」(岩波書店)をみると、一頁が十三行、一行四十字で一頁に五百二十字、従って二頁がちょうど千四十字になる。ある頁をひらいてみると、二頁で二行、二十字分だけ空白があるから、千二十字つまっていることになる。<sup>(注4)</sup>これは、この作品だけでなく、「父—その死」を見てもあまり変りない。この作家の特徴だろう。これに対して、池波正太郎の作品は改行が多くてよみやすい。会話の多いせいもあるが、一文ごとに改行しているのではないかと思われるくらい、どこをみても改行が多い。「霧の朝」のある頁—一頁と六行で千三十二字分—を数えてみると、実字数四百八十八字、半分しかない。こういうときはどうするのか。

私は、この場合も、やはりよんだ時間をその頁に詰まっているはずの字数に頁数をかけたもので割って、一字当りの秒数を出すべきだと思う。一頁に活字がびっしりつまっていて読みにくいことも、逆に改行が多くてよみやすいことも、黙読の際の条件の一つであって、それがよむときの速さに加味されてくる。よみ手にもいろんな人がいるように、読まれる本にもいろいろあるのが当然で、それらがつねにより手を制約している。

改行するかしないかは、書き手の意志だろうが、一頁を二段組みにするのは経済的な制約である。同じ一頁でも二段組み二十五行、一行二十六字という組み方は一頁が千三百字あって、さきの「みそっかす」の二倍をはるかにこえている。これで四百頁もよまされる<sup>(注5)</sup>

と、目も疲れるし当然速度も落ちる。岩波新書は組み方がゆったりして、一頁に十四か十五行しか組んでないのがあるし、一行も四十字から四十二字までで、内容はともかく、目の疲労からいうと、よみやすい本である。

#### 四

これらの本の条件が、よむ速度にどのように影響してくるかはわかりにくい。

たとえば「れくいえむ」<sup>(注7)</sup>をよんだときの記録がある。(一九七三年六月)二十頁を七分でよんでいる。一頁が十五行、一行三十八字だから、一頁が五百七十字でよみやすい本である。これを計算すると、 $(80 \times 7) + (50 \times 8) = 1067$ つまり、一字当り $0 \cdot 037$ 秒である。

同じ六月に「日本沈没」もよんでいる。この本は二段組みで上下二冊の長篇だが、記録をとったのは三十三頁分である。一行は二十五字、十五行で一頁。従って一頁の字数は千五百字で、同じ一頁でも「れくいえむ」の約倍の字数がある。三十三頁を四回にわけて測っているが、総計で十七分四十秒。一字当りの速度を計算すると、 $0 \cdot 03$ 一秒で「れくいえむ」よりも早い。

「予測された大惨事」はDC10の事故を扱った上下二冊、二段組みで一頁が千九十二字つまった本である。これを一九七八年七月によんだときの三十四頁分の記録があるが、三十分三十秒かかってよんでいる。一字当りが $0 \cdot 049$ 秒になる。この本がよみにくかったのは事実であるが、その原因にこの形式的な制約がどこまでかか

っているだろうか。

「日本沈没」をよんだとき、小説以外のものの速度を測ろうと思つて、「黄泉の王・私見高松塚」を学校の図書館から借りてきて読んでみた。この本は一頁が八百八拾字ある。はじめから十頁よむ度に時間を測り、それを三回くり返し、さらに二十頁をよんで測つた。この五十頁をよんだ速度が三十五分であつて、一字当りに直すと〇・〇四八秒である。これは「予測された大惨事」の〇・〇四九秒とあまり変らない。この「黄泉の王」は一頁のよみはじめから測つたのだが、はじめの十頁が一字当り〇・〇八二秒かかっている。次の十頁が〇・〇四八秒とはやくなり、次の十頁はさらに〇・〇三一秒と速度はちぢまるが、次の二十頁は〇・〇三九秒かかっている。このことは、一つはまだ内容の理解されにくい間はどうしてもよみがていねい、つまり遅いことを示している。もう一つ、ほとんどよみ進んでも、つねに注意を集中していないと内容がとらえにくいものは、よみとばすことができないから、よむ速度がある一定の速度でおさえられる。もつとも、注意を集中していなくてもよめる——これが「いいかげんによめる」ということだろう——本でも、大筋だけとはらえながら読み進まねばならないから、やはりそこにも速度の限界があるはずだ。今まで出てきた〇・〇三秒と〇・〇四秒という数字のちがいは、そこらへんにあるのではなからうか。

「黄泉の王」が一字当り〇・〇四八秒かかっているの、そのころよみかけていた岩波新書の「紫式部」<sup>(注11)</sup>について測つてみた。第一回は、八十六頁から百七頁までの二十二頁で、それにもう一度百十頁から百二十四頁までの十五頁とである。前者を十五分、後者を

七分でよんでいる。合計三十七頁よむのに二十二分ばかり、一字当り〇・〇五三秒である。岩波新書のよみややすさも予備知識としてある程度のこととは知つているということも、よむ速度にはあまり影響してないようである。

そこで今度は、私の仕事とは全く関係のない本をよむときの速度を測つてみた。岩波新書の「植物たちの生」である。

はじめの十二頁が九分、一字当りに直すと〇・〇六三秒で、やはりおそい。次の十一頁が七分三十秒。はじめの速さでいくと、七分半では十頁しかよめないから一頁分だけはやくなつてゐる。次の二十二頁もちょうど十五分かかっている。どちらも一字当りに直すと〇・〇五七秒となる。合計四十五頁の平均が〇・〇五九秒<sup>(金)</sup>である。

こうしてみると、よむ速度に専ら関係しているのは内容だけのように見えるが、はたして一頁の活字の組み方は無関係なのだろうか。さきの「予測された大惨事」はそのことを調べたくて、よむ速度を測つてみたのだが、関係があるのかないのか、結局よくわからなかつた。——主観的には、あると思うのだが——よむのが遅くなる理由にはいろいろあり、内容と形式からくる読みにくさが重なるべくと、どちらがどのくらいの要因を占めるのか見当もつかない。

## 五

とすると、逆に組み方のゆるい、活字の少ない本をよんでみたらどうか。「魔女伝説」をよんだのは、一九七八年八月であるが、この本を選んだのは、全くこのことを調べるためであつた。この本は一頁が十八行で一行は四十三字、一頁の字数は七百七十四字という

一番標準的な組み方がなされている。しかし、現実には印刷された活字ははるかに少ない。例えばはじめの十頁で一行に四十三字きんとつまった行をあげてみると、七十二行にすぎない。——当然全部つまれば百八十行あるはずである。次の十頁が六十八行、次の十頁が八十六行、次が五十七行、次が五十三行と、はじめ五十頁で、九百行のうち一行まともに字のつまっている行は三百三十六行にすぎない。ざっと三分の一で、どの頁も下の方がきれいに空いている。次の五十頁を調べてみると、二百八十五行とさらに少なく、もう五十頁をみると三百行と、これも三分の一である。

さて、この百五十頁をよむ速度を測って、それを一字当り秒で示すと、 $0 \cdot 0 \cdot 0$ 三秒となる。「れくいえむ」をよんだときの速さが一字 $0 \cdot 0 \cdot 0$ 三七、「日本沈没」が $0 \cdot 0 \cdot 0$ 三一秒であるからたしかに早くなっている。

頁で考えると、一万字分が十二・九頁になる。それをよむ速さが三・八分、十倍して百二十九頁よむのに三十八分かかる。この本は全体で四百七十四頁あるから、この速さで終りまでよむとおすとすると、ざっと二時間二十分かかることになる。もしもだれかもう一人いて、その人が先の「日本沈没」をよむ速さでよむとして計算してみると、そっちの人は十二・九頁を五・二分、百二十九頁を五十二分、終りまでよむのに三時間十分かかるから、全部よむ間に五分の差が生じる。もし私がつづけて次の本を同じ速度でよんでいるとすると、五十分あればかれが終りまでよむ間に次の本を百七十頁よむことができる。

(これは計算上であるが、実際にはこの本をよみおえたのはもっ

とはやく、百二十四分、二時間あまりである。)

五百頁ちかい小説を三時間あまりでよむことがすではやいのだから、さらにそれより一時間も早くよめるということは、この本が形の上でよみやすいということに、もっぱらその原因があるように思われる。

はじめにのみやすい例にあげた池波正太郎の作品を、私は新幹線の中で愛読した。父が死んでもう三年になるが、その三年前に入院してからこの六年間、私はかぞえ切れないほど新幹線で往き来した。その車中のひまつぶしに「鬼平犯科帳」をはじめとして池波正太郎の作品は手ごろだった。新大阪・広島間は二時間あまりである。一頁七百七十四字で三百頁の小説は一字 $0 \cdot 0 \cdot 0$ 三秒でよめば百十六分、ざっと二時間である。だから、ちようど手ごろなはずなのに実際よんでみると、一時間半かからずによみ終えてしまう。

ストップ・ウォッチと小型の電卓があれば一字当りの字数はすぐ出せるので、車中にもち込んで何回か測ってみたら、 $0 \cdot 0 \cdot 0$ 二秒と、やはり早かった。「鬼平犯科帳」は短編集だから、一篇よむ度に巻を閉じて休むというよみ方をとることにしてみた。こうするとちようどよくなった。トンネルをいくつもぬけて視野がひらけてくるころに、ちようどよみ終えて、夕ぐれの広島街の街に、あのがむしやらなスピードでしかもなめらかに入っていくのを、ぼんやり見ている。その記憶がいまに残っている。(手がるに測れるだけに記録もとらなかつたが、この一字当りの秒速はくり返し測ったから確かである。「魔女伝説」をよんだあと、十二月に「草雲雀」の百頁も調べてみた。簡単なメモしか残っていないので何頁から何頁までか不

明だが、半村良よりずっとすくなく、四十三字ある行は三百三十五行（二百百行に対し）で、十五・九多にすぎない。

新幹線の中では、テレビで有名な刑事コロンボのも何冊かよんだ。そのころ私はテレビをろくに見なかったから、テレビよりも先に本で知った。けっこうおもしろかったが、広島・新大阪間のよみ物としては短くて、一時間か、せいぜい一時間二十分で一冊よみ終つてしまふ。「偶像のレクイエム」で計算してみたら、一字当り〇・〇三秒と出たから、とくに早くよめるのではない。これらの本がどれも薄くて、七百七十四字の標準頁に直すと二百頁からそれ以下のせいである。

## 六

こうしてみると、内容のやさしい、筋の展開をおつていけばいいような小説だけ測るから、早いのもかもしれないと思われるかもしれない。私もそう思ったので一九七五年のころだが、何冊かのいわゆる純文学の小説について測ってみた。

そのころに出た足立巻一著「やちまた」、上下二巻になった江戸時代の国語学者の伝記のような小説、（鷗外の史伝ものの流れをくむ小説といえよるか、すらすらとはよめない小説）をよんでいた。その二百頁をよむ速さが約百分。一字当りに直すと〇・〇三<sup>(注15)</sup>五秒である。生徒の読書会があつてそのためによんだ島崎藤村の「破戒」は、はじめ十頁に九分かつたが、次の十五頁はもう七分ですんでいる。五十四頁よみ終つて時間を測ると二十八分二十<sup>(注16)</sup>秒。これは一字当りに直すと、〇・〇三三秒である。山本有三の

「路傍の石」もはじめ四十頁が十九分三十秒、次の五十頁は十八分三十秒と早くなって、百二十四頁よんだところで四十七分、一字あたりが〇・〇三〇<sup>(注17)</sup>秒となる。梅崎春生の「桜島」は六十四頁の短篇で、これをよむのに二十七分かかっている。一字当り〇・〇三三秒と似たような速さである。

小説をよみなれてる者にとっては小説のよみ方というものがかつていから、どんな小説でも大して変らない時間でよめるのだと思う。黙読のしかたというのは、音読に比べてはるかに複雑である。音読と同じように一行の上から下へ、行をおつて次々とよんでいくのでは、はやく本はよめない。黙読が、たとえば一番早い場合には音読の十倍もの速さでよめるのは、だいじなところを押さえながら、どうでもいい所はどんどんとばしてよむからだといえよう。退屈そうな所はよみとばすことを覚えなにかぎり、本をよむ主体性を読者がにぎることはできない。

私のよみ方からいうと、ここはよまなくてもよさそうだと見当をつけた何行かは、ただ全体をばつと眺めるだけで、よまないか、ちよいちよいと数か所をよむだけにする。一つの文でも、少し長いような文は、途中までよんであととばしたりする。とにかく興味のない所、必要のなさそうな所はよみとばす。こまかな所まで、一々著者につきあう義理はない。もちろんこの、眺めただけで、あるいははじめをよみかけただけで、この数行はよまなくても全体の理解にはこまらないうと見当がつけられるようになるまでには、それだけ修業をつまなければならぬ。

しかし、黙読はじつに自由だから、たとえよみとばしてもそこへ



また戻ってきて読むことができるし、大切なところは二へんも三べんもくり返してよめばいい。そういう自由なよみ方をしていううちに、本のよみ方はわかってくるのである。

本ははじめの一頁から終りまできちんとよまなければならぬものではない。途中のおもしろいところをひらいて、そこからよみ始めてもいいし、よみかけてつまらなかつたら、何頁か飛ばし飛ばしよんだってかまわない。

もっとも、多くの本の中には、一文一文がきちんとつみ重なって構成された文章があつて、そのような文章は、一文一文を、それも文によつてはくり返しくり返し丁寧によまないと、意味がつかめない。この文章だつて、いいかげんによみとばして頂いて結構だが、その途中には丁寧によんでくれないとわからない所もまざつてゐる。そして、こみいった文章をよむのには、どうしても時間がかかる。一字当り〇・〇四から五秒という時間はそれ以上はちぢまらないと思ふ。

けれども小説は、人物と出来事さえしつかり押さえておけば、あとは適当によみとばせる。一字当り〇・〇三秒という速さがそこにでてくるのである。

## 七

さて生徒たちのよみの速さはどうであるか。これについてはもう紙数もつきたので、簡単にふれてみたい。

一九七八年、高等学校二年の三クラスの生徒に夏休みの宿題として課題図書をよませたとき、自分のよんだ時間を測つて報告させた。

十頁よんだ時間を何回か測り、それから一冊全体をよむ時間を推計させた。

二期期にその報告をもとに、各人のよんだ本に一つ一つ當つてそれぞれの総字数をしらべ、それでそれぞれの時間を割つて、一字当りの速さを出した。そのあと、その三クラスにそれぞれ二回ずつ、図書館にそろえてある「方丈記私記」か「羊の歌」をよませた。十五分よんで、よんだページを行まで勘定させた。

こうして各人の一字当り秒を計算し、これらの結果を最終的にまとめたのが次の表である。

一字当り秒	13P (1万字)	延人数
0.20秒以上	33分以上	23人 (注19)
0.19 ~18秒	31分 "	16人 (注20)
0.17 ~16 "	27 " "	16 "
0.15 ~14 "	24 " "	53 "
0.13 ~12 "	21 " "	58 "
0.11 ~10 "	17 " "	77 "
0.09 ~ 8 "	14 " "	70 "
0.07 ~ 6 "	11 " "	33 "
0.05 ~ 3 "	7 (注18)	14 "
合 計		360人

こうしてみると、延人員三百六十人のうち、一字当り〇・〇五秒よりはやくよんだものは延十四人、全体の三・九%。これを紙数の都合で省略したが、原表でたしかな実数をしらべてみると六人、つまり一組二名となる。少ないのか多いのか、比較の対照がないから、わからない。

これらの生徒は一万字、約十三頁よむのに七分前後かかる。そし

てその二倍から三倍かかってよむ生徒が二百五人、五十六・九多い。さらに二十％近くは三倍半から四倍かかる。この速度でよみますと、ヘミングウェイの「老人と海」をよみおえるのに、一番早い生徒は一時間たらず、ふつうの生徒は二時間から三時間、おそい生徒は四時間かかる。

本 のよみ方とその訓練については、多くの問題が問われもせずに残されている。音読についてもそうである。黙読の問題はなおさらである。本のすきな人が、自分と自分のまわりの者について少しでも調べてみようというきっかけになることができれば、このわたしを試みも何らかの役に立つと思う。(80・2・16)

注1 「これもさきの調査で、テープ録音のニュースを聞いてもらって、早い、遅いを言ってもらったが、これまでニュースの読みの標準速度といわれた一分間三百字をはるかに越す三百四十字で、「ちよつどいい早さ」という人が三分の二を占めた。早めの読みへの適応がみられるのである。黒柳徹子さんがモテるわけなのだ。」「言語」一九八〇・一 最近若者語事情 稲垣吉彦 P 47

注の注・ここには「本をよむ」ことと「しゃべる」こととの混同がある。しゃべる方がはやいのである。それを含めて興味のある意見である。

注2 高一A君に「坊っちゃん」(中一用・東京書籍)二頁分(一三七六字)を二回よんでもらい、それぞれの一字当りの速

さを出した。一回めが二五六秒―一字当り〇・一八六秒。二回めは二六四秒―一字当り〇・一九二秒。「羅生門」(高一用・明治書院)二頁分(二二八〇字)が二四〇秒―一字当り〇・一八八秒。

高一B君「羅生門」一九四秒―〇・一五二秒。

「今日と明日の芸術」(高三用・筑摩書房)二頁分(二二二字)高三C君、二四八秒―一字当り〇・一八九秒。D君二四〇秒―一字当り〇・一八三秒。E君二〇六秒―一字当り〇・一五七秒。

以上はすべて一九七五年七月の記録。

注3 「砂漠と花と銃弾」三好徹、P 324 ~ P 325 L 5・P 335 L 15 ~ P 336 (講談社文庫「闇のなかのあなた」昭55・1)。

注4 昭27・2 P. 102 ~ P 103

注5 昭54・12。文芸春秋社。P 78 ~ P 76 L 6

注6 「エネルギー」アーサー・ヘイリー著 新潮社 P 445 一九七九・九。

注7 郷静子著 中央公論社 昭48・6。

注8 日本文学 (21 L. (行) × 50 L. (字))

頁数	総字数	よんだ時間(秒)	一字当り(秒)
①	9450	300	0.031
②	12600	255	0.020
③	6300	320	0.050

①	6	6300	185	0.029
計	33	34650	1060	0.031

社〇 「字測された大惨事」 DC10事敵のすべて・草思社。  
(21L.×521.)

	頁数	総字数	よんだ時 間 (秒)	一字当り 秒
①	10	10920	510	0.047
②	8	8736	330	0.037
③	8	8736	480	0.055
④	8	8736	510	0.058
計	34	37128	1830	0.049

社〇 「黄泉の王・私見高松塚」新潮社。(20L.×441.)

	頁数	総字数	よんだ時 間 (秒)	一字当り 秒
①	10	8800	720	0.082
②	10	8800	420	0.048
③	10	8800	270	0.031
④	20	17600	690	0.039
計	50	44000	2100	0.048

社二 「樂式部」清水好子著。(16L.×421.)

	頁数	総字数	よんだ時 間 (秒)	一字当り 秒
①	22	14784	900	0.061
②	15	10080	420	0.042
計	37	24864	1320	0.053

社三 「植物たちの生」沼田真著。(17L.×421.)

	頁数	総字数	よんだ時 間 (秒)	一字当り 秒
①	12	8568	540	0.063
②	11	7854	450	0.057
③	22	15708	900	0.057
計	45	32130	1890	0.059

社三 「魔女伝説」半村良著, 中央公論社。(18L.×431.)

	頁数	総字数	よんだ時 間 (秒)	一字当り 秒
①	144	111456	2580	0.023
②	111	85914	1980	0.023
③	83	64242	1200	0.018
④	129	99846	1680	0.016
計	467	361458	7440	0.021

注17 「画像のレクイエム」刑事コロノボ9, 二見書房。(15L.  
×42L.) 実頁数250。42(字)+15×250=157500(字), 157500  
+774÷203.5(頁)

	頁数	総字数	よんだ時 間(秒)	一字当り 秒
①	40	25200	900	0.036
②	41	25830	900	0.035
③	51	32130	990	0.031
④	41	25830	840	0.033
⑤	51	32130	930	0.029
⑥	26	16380	540	0.033
計	250	157500	5100	0.032

注18 「やちまた」河出書房。(19L.×45L.)

	頁数	総字数	よんだ時 間(秒)	一字当り 秒
①	40	34200	1080	0.032
②	45	38475	1340	0.035
③	38	32490	1010	0.031
④	31	26505	940	0.035
⑤	45	38475	1540	0.040
計	199	170145	5910	0.035

注19 「破戒」新潮社全集。(19L.×51L.)

	頁数	総字数	よんだ時 間(秒)	一字当り 秒
①	10	9690	540	0.056
②	15	14535	420	0.029
③	29	28101	740	0.026
計	54	52326	1700	0.032

注17 「路傍の石」新潮文庫。(17L.×43L.)

	頁数	総字数	よんだ時 間(秒)	一字当り 秒
①	14	10234	390	0.038
②	26	19006	600	0.032
③	51	37281	1110	0.030
④	33	27047	720	0.027
計	124	93568	2820	0.030

注18 「桜島」新潮文庫。(18L.×43L.)

	頁数	総字数	よんだ時 間(秒)	一字当り 秒
①	26	20124	720	0.036
②	38	29412	900	0.031
計	64	49536	1620	0.033

注19 「方丈記私記」堀田善衛著 新潮文庫(17行×43字)  
注20 「羊の歌」加藤周一著 岩波新書(17行×42字)

(京都・京都西高等学校教諭)